（第３種郵便物認可）

日報論壇

復興策は生き物を考えて

加藤直子

震災前、幻の鳥オオセッカの越冬が確認された釜石市片岸町の鵜住居川河口付近は、年間を通じ、１００種以上の野鳥が見られる三陸沿岸でも屈指の良好な自然環境となっていた。

その一画に水路の水を引いたビオトープを造ったのは6年前。以来4年間、観察を続けた。野鳥、昆虫類、甲殻類、魚類の稚魚が現れ、鵜住居小学校の4年生と水路調査を行い、大きなウナギが取れたときは大騒ぎだった。汽水域であったが、オガエルが産卵。マダラヤンマが姿を見せた。

自然が戻りつつある。海岸湿地は環境省の日本の重要湿地500「陸中リアス海岸の湾奥沿岸湿地群」の構成要素で、環境基本計画にあるように観光や水産業のためにも保全されなければならない。

しかし、被災地特区で環境アセスメントは実施されない。釜石市では14㍍余の高さの防潮堤を造り、河口には水門をという復興計画だ。住民の命が第一だからだというが、食物連鎖の土台になる分解者、生産者などの生き物を保護しなければ、高次消費者の居場所がなくなる」と平田オリザさんが述べている。社会的弱者とは物言う場を与えられない、声を出せない人々、そして、物言えない生き物たちだと私は言いたい。

同じ被災地に住みながら被災しなかった私ができることとして始めたボランティア活動も1年9カ月になろうとしている。生存者の責務に背中を押された仲間とともに活動しながら被災者の悲惨な状況を目にし、口に出すことをはばかってきた。だが、命の土台を無視した復興策が、まかり通るのを見ぬふりはできない。だから、これまで封印してきた心の内を非被災者としてではなく、三陸沿岸の一住民として、述べる決心をした。

（釜石市　子どもエコクラブサポーター　66歳）

長老に聞くと、昔に戻った、というのだ。何もかも消え去ったと思ったこの地に再び稚魚の群れが戻り、今年の夏にはシュレーゲルアオガエルが産卵。マダ

人間の命は守られない。

私たち人間は高度な脳を持ち、自然災害など起こりうる危険に対し、学習次第で対処できるということを肝に銘じたばかりだ。海岸